

榎

次世代へ伝えたい
埼玉の伝統工芸

江戸木目込人形(さいたま市岩槻区)

木目込人形は、人形の胴体に彫った溝に直接布を埋め込んで衣装を着せた人形で、江戸中期、京都上賀茂神社で誕生したと言われています。この手法はやがて江戸に伝わり、人形づくりが盛んだった岩槻でも用いられるようになりました。岩槻の江戸木目込人形は、昭和53年、埼玉県としてはじめて国より伝統的工艺品に指定されています。

髪の毛を整え仕上げをする、伝統工芸士の新井久夫さん

江戸木目込人形

江戸木目込人形を語るとき、その瞳はこどものようにキラキラと輝きます。

伝統工芸士の新井久夫さんは人形師の家に生まれ、工房を遊びの場として育ちました。その作品には、気品がありながら、どこかに人懐っこい感じが滲んでいます。大人になった今でも、心は人形と戯れているのかもしれない。

新井さんは伝統を守るだけではなく、日々様々な工夫を取り入れています。例えば、衣裳については、生地模様を生かすだけでなく、積極的に箔押しや彩色を利用した絵付けを取り入れています。また、木目込人形では目を筆で描く「描き目」が常識ですが、新井さんは、ガラスの目玉を埋め込む「入れ目」を一部の人形に採用し、目のクリッとした愛らしさを演出しています。優れた職人は、いかなる分野であれ、伝統を守るのみではなく、時代に合わせ常に創意工夫を加えながら、発展的に継承していくものようです。

岩槻人形は、他の伝統産業よりも細かく分業化されており、多くの職人によるネットワークが形成されています。そのため、一分野の職人がいなくなってしまうと、それだけで人形作り全体が難しくなります。将来にむけ、岩槻人形の技術を後継者に技術を継承していく必要があります。

一方で、来年には岩槻人形会館(仮称)が完成する予定です。資料などを収集・保存するばかりでなく、後継者の育成や地域振興の核としても計画されています。これを機に岩槻の人形文化がさらに発展することを願ってやみません。

(写真・文／執行政信)



胡粉(ごふん)(貝殻を焼いて作った白色の顔料)を胴体に塗る作業



生地の裁断作業。布地選びも職人の大事な仕事だ



布を木目込んでいくための溝を作る筋彫りは人形の仕上がりの善し悪しに大きく影響する



専門の職人がひとつひとつ丹念に人形を作り上げていく



新井人形店

さいたま市岩槻区愛宕町9-35

TEL.048-756-2364

<http://www.arai-kimekomi.co.jp/>